（11 月　29 日）「詩編 135：1～7」
主を賛美せよ、恵み深い主を。喜ばしい御名をほめ歌え。
（詩編 135 編 3 節）

・「唯一の神、主をたたえよ」：賛歌です。聖歌 346 番「ほめ讃えよ　生ける神を」という歌をご存じでしょうか。347 番「アブラハムを　召された神」と調が違うだけですので、その歌詞を見て曲が頭に浮かんだ方もおられるかもしれません。
・その 346 番の 2 節に、このような歌詞があります。「たぐいもなき　聖なる主の　その麗しさを見つめよ　すべてのもの　主を讃えよ　み旨に従い仕えよ」。この詩は、詩編 135 編の 3 節と明日読まれる 13 節が元になっています。
・神さまのみ名を賛美し、ほめたたえる。イスラエルの人たちはそのことをいつも大切にしてきました。わたしたちはどうでしょう。お祈りの中で、賛美の中で、いつも神さまのみ名をほめたたえる。そのことを大切にしていきたいものです。

（11 月　30 日）「詩編 135：8～14」
主よ、御名はとこしえに。主よ、御名の記念は代々に。（詩編 135 編 13 節）

・この 135 編 8～12 節には、何度も繰り返し書かれてきたイスラエルの歴史が綴られます。8～9 節では出エジプトの際、エジプトの初子を打たれた出来事が書かれ、10～11 節にはいわゆる「約束の地」に入ったときのことが書かれます。
・わたしたちは日本書紀や古事記を繰り返し読むことはあまりありません。それは別に歴史をないがしろにしているということではないでしょう。イスラエルの人々は、自分たちのアイデンティティを確かめるためにも、神さまとの歴史を大事にしているのです。
・現在のイスラエルやユダヤを語るときには、彼らがこのような過去をずっと大切にしているという事実を押さえておくべきです。そのことをないがしろにしてしまったら、彼らとの対話も成り立たないのかもしれません。

2025 年 11 月

詩　編　　通　読

11 月

（11 月　1 日）「詩編 119：81～88」
わたしの魂は　あなたの救いを求めて絶え入りそうです。あなたの御言葉を待ち望みます。
（詩編 119 編 81 節）

・今日読まれた 8 節の中には、「御言葉（81 節）」、「仰せ（82 節）」、「掟（83 節）」、「律法（85 節）」、「戒め（86 節）」、「命令（87 節）」、「定め（88 節）」とそれぞれ違った言葉で神さまから与えられるものが書かれています。
・「御言葉」以外のこれらの言葉をみると、どちらかというとわたしたちを縛るようなイメージがあります。上から「こうしなさい」と言われたり、「こうすることが正しいのだ」と枠に入れられたりする感じでしょうか。
・ではイエス様のみ言葉はどうでしょう。実はその中にも、「こうするべき」という言葉は多いのです。しかしイエス様は愛をもって接して下さることをわたしたちは知っているので、耳に心地よいものとなるのかもしれません。そのみ言葉を待ち望みましょう。

（11 月　2 日）「詩編 119：89～96」
あなたへの信仰は代々に続き　あなたが固く立てられた地は堪えます。
（詩編 119 編 90 節）

・キリスト教は家族宗教でしょうか。あるいは個人的なものでしょうか。カトリックや聖公会では、「先祖代々」とか「～代目クリスチャン」といった言葉を聞くことがあります。それに対してプロテスタント教会では、個人の信仰を大切にする傾向があるようです。
・ユダヤ教はもともと、民族の宗教でした。また日本聖公会は英国国教会の流れを汲みますが、もともとはその名の通り国の宗教でした。また日本に宣教師が入って来たときには、村ごと宗教を変えるという例も多かったようです。
・「信仰の伝承」ということを、わたしたちも大切にすべきではないでしょうか。お墓が云々ということではなく、本当に「良い」ものを子どもたちに伝えていく。信仰を代々に続かせていくことがわたしたちには求められているのかもしれません。

（11 月 27 日）「詩編 133 編」
【都に上る歌。ダビデの詩。】見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。
（詩編 133 編 1 節）

・「麗しい兄弟愛」：巡礼者の歌です。讃美歌 21 という聖歌集があります。聖公会ではあまり使うことがありませんが、その 162 番に「見よ、兄弟が」という歌が入っています。133 編 1 節をそのまま歌詞にしています。
・作者は前の 132 編と同様、ここでもシオンを祝福の場所として定めます。そしてシオンで子どもたちが親とともに座っている姿を喜ぶのです。それは教会が、「神の家族」としてお互いを「兄弟姉妹」と呼ぶのと似ているのかもしれません。
・神さまを中心とした結びつきは、教会特有のものだと思います。そこに集う人は、誰一人孤独ではありません。「神の家族」としてお互いを大切にしていく、そのような共同体でありたいものです。

（11 月 28 日）「詩編 134 編」
天地を造られた主が　シオンからあなたを祝福してくださるように。
（詩編 134 編 3 節）

・「夜の礼拝の祝福」：巡礼者の歌です。120 編から続いてきた「巡礼者（都に上る者）の歌」の最後のものです。この詩は 3 節しかなく、巡礼者の歌の中でも一番短いものとなっています。
・作者は 1～2 節で、「主をたたえよ」と促します。いわゆる賛美の招きです。都に上ることが叶い、一番になすべきことは神さまを賛美することなのです。わたしたちの礼拝も、賛美から始まります。
・わたしたちはどのような思いで、礼拝に向かっているでしょうか。一週間にあったことを思い返し、そして礼拝に集うことができたことを感謝し、賛美することが大切なのではないでしょうか。その上で、神さまからの祝福を求めるのです。

（11 月 25 日）「詩編 132：1～7」

見よ、わたしたちは聞いた　それがエフラタにとどまっていると。ヤアルの野でわたしたちはそれを見いだした。

（詩編 132 編 6 節）

・「ダビデの誓いと主の誓い」：巡礼者の歌です。イスラエルには王がいました。初代がサウル、二代目がダビデ、三代目がソロモンです。その中でもダビデが最も偉大な王として、人々に記憶されています。
・この詩編 132 編は、ダビデが神さまに対して何をし、そして神さまがダビデに対して何を約束したのかを語ります。イスラエルの人々にとって、ダビデの出来事はとても大切なものでした。
・ダビデは神さまに、「居場所」を定めると誓います。旧約聖書には「神の箱」というものが出てきます。そこに神さまは臨在すると考えられ、それをどこに置くべきかが大事なことでした。ダビデはその場所を見出していきます。

（11 月 26 日）「詩編 132：8～18」

ダビデのために一つの角をそこに芽生えさせる。わたしが油を注いだ者のために一つの灯を備える。

（詩編 132 編 17 節）

・神さまはシオンを、神の箱が置かれる場所として選びます。8～9 節は、神の箱の行進の際の礼拝式文でもあるようです。神さまはこのようにして、ダビデの子孫に対してシオンで君臨することをダビデに誓います。
・さらにシオンの食糧を豊かに祝福することや、飽きるほどパンを与えることを約束します。そして 17 節の「一つの灯を備える」というのは、子孫がとだえないことの象徴だということです。
・ただこの「シオン」が、現在の「エルサレム」という場所と同一視しすぎると、その場所だけが聖なるところ、その場所にのみ、神さまの臨在を認めるということになり、争いの火種となります。「新しいエルサレム」を求めていきましょう。

（11 月　3 日）「詩編 119：97～104」

わたしはあなたの律法を　どれほど愛していることでしょう。わたしは絶え間なくそれに心を砕いています。

（詩編 119 編 97 節）

・「律法を愛している」と作者は書きます。イメージで言うと、毎日六法全書を隅から隅まで読み、暗記し、実践しているという感じでしょうか。以前、「聖書男」という本が話題になったことがあります。
・聖書が書いてあることをそのまま実行していったらどうなるのか、著者が一年間実践していく日記のような本です。十戒のような有名な戒律だけでなく、「罪人には石を投げよ」、「月の初めには角笛を吹きなさい」ということを文字通りにおこなっていくのです。
・作者はその中で実行不可能な「律法」に苦しみながらも、神聖な部分に触れていきます。神さまから頂いた掟は自分たちを縛り付けるのではなく、生きる道を与えるものです。そのことを感じ、わたしたちは「聖書」を愛していきましょう。

（11 月　4 日）「詩編 119：105～112」

あなたの御言葉は、わたしの道の光　わたしの歩みを照らす灯。

（詩編 119 編 105 節）

・この詩編 119 編 105～112 節は、昼の祈り（祈祷書 81 頁）で用いられる詩編です。み言葉であるイエス様に照らされているから、わたしたちは歩むことが出来るということを感謝するのです。
・聖歌 475 番にこのような歌詞があります。「光の子どもらしく　主を慕い歩む　全地を照らす光　主イエスこそわが星　暗闇は過ぎ去り　夜も昼も輝くみ座より来たる小羊は　わが光イエス」。
・「暗闇は」以降が全節の繰り返し部分ですが、イエス様が来られることでわたしたちに光が与えられるという「希望」を歌っています。神さまはわたしたちを裁くのではなく、良い方向に導くためにイエス様を遣わされたのです。

（11 月　5 日）「詩編 119：113～120」
心の分かれている者をわたしは憎みます。あなたの律法を愛します。
（詩編 119 編 113 節）

・二心（ふたごころ）という言葉をご存じでしょうか。辞書で調べると、「①味方や主君にそむく心。裏切りの心。②ふたりの人に同時に思いを寄せること。浮気心。」と書いてありました。
・今日の箇所にある「心の分かれている者」とは、二心を持つ人なのかもしれません。神さまは十戒の中で、「わたしのほかに神があってはならない」と定められました。そしてご自分のことを、「妬む神」だと語られました。
・日本に住んでいると、一神教の考え方が排他的に映ることもあります。しかし大切なものは何なのか、それをしっかり考えているのか、問われているようにも思います。あなたにとってイエス様は、そのようなお方でしょうか。

（11 月　6 日）「詩編 119：121～128」
それゆえ、金にまさり純金にまさって　わたしはあなたの戒めを愛します。
（詩編 119 編 127 節）

・「金言（きんげん）」という言葉があります。処世上の手本とすべき内容を持つすぐれた言葉という意味です。これが仏教用語になると、読み方が「こんげん」となり、仏の口から出た、不滅の真理を表す言葉になるそうです。
・わたしたちは聖書の言葉を、どのように捉えているでしょうか。みなさんの中には愛唱聖句があり、ことあるごとにそれを唱えているという方もおられることでしょう。ちなみにわたしの愛唱聖句は、「求めよ、さらば与えられん（マタイ 7：7）」です。
・その言葉が、金よりも、どんな純金よりも素晴らしいものになればと思います。目に見えるものではなく目に見えないものに支えられて歩んで行く、そのようなわたしたちでありますように。

（11 月 23 日）「詩編 130 編」
わたしの魂は主を待ち望みます　見張りが朝を待つにもまして　見張りが朝を待つにもまして。
（詩編 130 編 6 節）

・「深い淵からの叫び」：巡礼者の歌です。今年の降臨節（アドベント）は今日から一週間後、11 月 30 日から始まります。奈良基督教会では例年、その前の週の日曜日（つまり今日）、クリスマスの飾りつけをおこないます。
・主にのみ望みをおき、主を待ち望む。そのことをこの降臨節に心に留めたいものです。聖歌 64 番「久しく待ちにし　主よとく来たりて」という歌があります。9 世紀のグレゴリアンチャントです。
・その 2 節にこのようにあります。「あしたの星なる　主よとく来たりて　おぐら(暗)きこの世に　み光をたまえ　主よ　主よ　み民を救わせたまえや」。暗闇の中、朝日を待ち望むわたしたちに、必ず光は訪れます。

（11 月 24 日）「詩編 131 編」
わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を、幼子のように　母の胸にいる幼子のようにします。
（詩編 131 編 2 節）

・「幼子のような信頼」：巡礼者の歌です。作者は神さまに対し、「驕っていません」、「目は高くを見ていません」、「追い求めません」、「魂を沈黙させます」と語ります。どれも「自分の力に頼る」ことと通じるようです。
・イエス様はマタイによる福音書 18 章 3 節で、「はっきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」と言われました。同じようにパウロはフィリピ 3 章の中で、「肉に頼らない」ことの大事さを手紙に書きます。
・「幼子のように」神さまに信頼を置くことが、大切なのです。すべてのものが与えられることを信じ、よき方へ導いてくださると信頼を置く。自分の力を誇示するのではなく、弱いわたしたちを守ってくださる神さまにその道を委ねましょう。

（11 月 21 日）「詩編 128 編」
妻は家の奥にいて、豊かな房をつけるぶどうの木。食卓を囲む子らは、オリーブの若木。
（詩編 128 編 3 節）

・「家庭の幸福」：巡礼者の歌です。「いかに幸いなことか」と作者は語ります。この言葉は「幸いなるかな」と語られたイエス様の山上の説教を思い起こします。ではこの詩の中では何が、「幸い」だというのでしょうか。
・二つのことが書かれています。2 節では労苦が報われ、手にしたものが自分の食べ物になるということが書かれています。そして 3 節には妻や子どもたち、つまり家族が与えられていることが幸いだというのです。
・それらは当時、神さまからの祝福だと考えられていました。実り多き働きと繁栄する家族、それらは神さまから与えられたものだというのです。わたしたちも同じように、自分の力ですべてが得られたのではなく、神さまの恵みによるものだと感謝しましょう。

（11 月 22 日）「詩編 129 編」
わたしが若いときから　彼らはわたしを苦しめ続けたが　彼らはわたしを圧倒できなかった。
（詩編 129 編 2 節）

・「虐げられたイスラエルの祈り」：巡礼者の歌です。作者は過去の危機的状況を思い起こしています。「わたしが若いときから　彼らはわたしを苦しめ続けたが」という言葉が二度繰り返されています。よほどの苦しみだったのでしょう。
・3 節にある「わたしの背を耕し」とは、エルサレムの滅亡を指していると考えられています。エルサレム神殿が崩壊し、イスラエルの人たちがバビロンに捕囚として連れていかれた歴史的事実は、彼らをいつまでも苦しめていました。
・しかし思い返せば、その苦しみの中にも神さまがいたではないか、それが作者の信仰です。わたしたちにも苦しみや悲しみのときは来ます。その中においても、神さまはわたしたちに手を差し伸べておられる。そこに信頼を置きましょう。

（11 月　7 日）「詩編 119：129～136」
御言葉が開かれると光が射し出で　無知な者にも理解を与えます。
（詩編 119 編 130 節）

・「恐れにとらわれ　さまよう闇路に（聖歌 477 番）」という歌をご存じでしょうか。作詞者は宮崎光さん、作曲者は鳥井仁呈となっています。この鳥井仁呈というのはペンネームで、宮崎尚志さん、光さん、道さんという親子三人のことです。
・鳥井仁呈（とりいにてい）は三位一体という意味のある「トリニティ」をもじってつけられたそうですが、この聖歌 477 番の 3 節は今日の箇所である詩編 119 編 129～136 節をベースに作られました。
・「心は開かれ　み言葉かがやく　黒雲過ぎ去り　日だまりに向かう　旅路をふみだす　あなたを見つめ　神よ光を　生きる希望を」。わたしたち一人ひとりに希望が与えられますように、祈り続けていきましょう。

（11 月　8 日）「詩編 119：137～144」
わたしの熱情はわたしを滅ぼすほどです　敵があなたの御言葉を忘れ去ったからです。
（詩編 119 編 139 節）

・ヨハネによる福音書 2 章には、イエス様が神殿から商人を追い出した記事が載せられています。マタイ・マルコ・ルカ福音書ではそれぞれ物語の後半、イエス様のエルサレム入城の後にこの出来事があるのですが、ヨハネ福音書では物語の序盤に書かれています。
・イエス様はそのとき、「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない」と叫びます。それを聞いて弟子たちは、「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」と書いてあるのを思い出したそうです。
・正しいことをしているつもりでも、いつの間にかみ言葉（神さまの思い）から離れてしまうことがあります。そのようなときに“熱く”わたしたちを引き戻してくださる方がおられます。それがイエス様なのです。

（11 月　9 日）「詩編 119：145～152」

あなたの定めを見てわたしは悟ります。それがいにしえからのものであり あなたによってとこしえに立てられたのだ、と。

（詩編 119 編 152 節）

・聖公会の教会では、祭色ごとに替えられるチャリスベールや司祭のストールなどに刺繍を施すことが多いです。そしてその中に、「α（アルファ）」と「Ω（オメガ）」がデザインされていることもあります。
・ヨハネの黙示録 22 章 13 節には、「わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである」というイエス様の言葉があります。まさに「いにしえからとこしえまで」です。
・イエス様は決して 2000 年前の人たちだけに関わった方ではありません。わたしたちが生きる現代も、そしてわたしたちの子どもや孫たちが生きるときにも、いつも関わって下さいます。わたしたちはその光を求め続けるのです。

（11 月 10 日）「詩編 119：153～160」

御言葉の頭はまことです。あなたはとこしえに正しく裁かれます。

（詩編 119 編 160 節）

・今日の箇所の 154 節に、このような言葉があります。「わたしに代わって争い、わたしを贖い　仰せによって命を得させてください」。しかし「わたしに代わって」ではなく、「神さまに代わってわたしが争い」となっている場合も多いようです。
・政治的な問題について、一方的な視点から「これが正義で、あれは悪だ」と論じる方がいます。その考え方に同調している人は気持ちいいかもしれませんが、否定をされて傷ついている方にも目を向けないといけないのではないでしょうか。
・「正しい人は一人もいない」からこそ、すべての裁きは神さまにお任せすべきなのです。「正義」は神さまが決めることであって、わたしたちがこうだと決めつけることはできないのです。

（11 月 19 日）「詩編 126 編」

種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は　束ねた穂を背負い　喜びの歌をうたいながら帰ってくる。

（詩編 126 編 6 節）

・「涙は喜びに変わる」：巡礼者の歌です。ルカによる福音書 6 章 21 節に、このような言葉があります。「今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる」。イエス様が語られた言葉です。
・わたしたちは作物の種を蒔くとき、期待に胸をふくらませます。しかし当時の人は、自分たちの食べる分から一部を取って、未来への希望として蒔いていました。そこには不安と悲しみがあったことでしょう。
・しかし作物が豊かに育ち、収穫することができたときに、人々は喜びの歌を歌うのです。悲しみは必ず喜びに変えられる。まもなくアドベントを迎える今だからこそ、心に留めておきたい言葉です。

（11 月 20 日）「詩編 127 編」

いかに幸いなことか　矢筒をこの矢で満たす人は。町の門で敵と論争するときも　恥をこうむることはない。

（詩編 127 編 5 節）

・「主の祝福がなければ」：巡礼者の歌です。「はしごを外される」という言葉があります。その意味は、仲間や味方から裏切られ孤立してしまうということ。 一緒に何かに取り組んでいたのに、急に手を引かれて仲間から取り残されるというような状態を表します。
・神さまのみ心と思って何かをしていたのに、そうでないことは多くあります。また神さまが共にいてくれていると信じていたのに、いつのまにか孤独を感じてしまうことだってあります。
・そのときには、「主御自身が建ててくださるのでなければ　家を建てる人の労苦はむなしい。（1 節）」と書かれた言葉を思い出しましょう。神さまはどこにいるのか、何を求めておられるのか、いつも祈りの中で尋ね求めていきたいものです。

（11 月 17 日）「詩編 124 編」
わたしたちの助けは　天地を造られた主の御名にある。（詩編 124 編 8 節）

・「イスラエルの救いである主」：巡礼者の歌です。1、2 節に「主がわたしたちの味方でなかったなら」という言葉が繰り返されています。作者はエルサレムに向かう中で、神さまの助けを思い起こしているようです。
・わたしたちは祈りのときにたくさんのことを願うものの、「こういうことをしてくださってありがとうございました」という感謝を忘れてしまうことがあります。もし子どもから次々に願いを要求されるものの、「ありがとう」の一言がなかったらどうでしょうか。
・わたしたちはその歩みの中で、何度も神さまのみ手に支えられ、また神さまの言葉に励まされ、そして神さまに起き上がらされてきたのではないでしょうか。そのことを思い返しながら、新たな歩みを進めることが大事なのです。

（11 月 18 日）「詩編 125 編」
よこしまな自分の道にそれて行く者を　主よ、悪を行う者と共に追い払ってください。イスラエルの上に平和がありますように。　（詩編 125 編 5 節）

・「主への不動の信頼」：巡礼者の歌です。詩の中に「シオンの山」が出てきます。「シオン」とは旧約聖書のエルサレムの別名であり、「神が住まわれる主の山」とも呼ばれます。そしてやがて来る、新しい神の都の象徴としての意味も持ちます。
・奈良基督教会には、「シオンホール」という集会が出来る建物があります。教会の宣教 100 周年のときに建てられたもので、教会だけではなく幼稚園でも使用しています。この「シオン」には、心と思いを一つにし，義のうちにともにとどまる主の民のことも指します。
・神さまへの信頼をしっかりと置いて、神さまのみ心に聞きながらともに集う。そのような思いで「シオンホール」という名は付けられたのではないでしょうか。その思いを汲み、わたしたちも「シオン」で神さまを賛美しましょう。

（11 月 11 日）「詩編 119：161～168」
日に七たび、わたしはあなたを賛美します　あなたの正しい裁きのゆえに。
（詩編 119 編 164 節）

・長かった詩編 119 編も、いよいよあと二日になりました。繰り返しになりますが、この詩編は教育的な目的でつくられています。アルファベットが頭文字となる 8 節からなる文が、22 個あるわけです。
・人々はそれらを教訓として学びます。そして何度も繰り返し唱えていくのです。164 節に「日に七たび、わたしはあなたを賛美します」とあります。「七たび」というのは、何回もという意味です。
・これらの教えを何度も何度も繰り返しながら、神さまの愛に気づかされる。そしていつの間にか、それらの言葉が神さまへの賛美に変わっていくのです。聖書は神さまからのラブレター、そして詩編は神さまへの応答なのです。

（11 月 12 日）「詩編 119：169～176」
わたしが小羊のように失われ、迷うとき　どうかあなたの僕を探してください。あなたの戒めをわたしは決して忘れません。
（詩編 119 編 176 節）

・119 編も今日で終わりです。わたしたちはこの詩編を通して、神さまからの戒めを学び、神さまがどのようにわたしたちに関わって下さっているかを知ることができました。しかし「喉元過ぎれば」の言葉通り、わたしたちはすぐに大切なことを忘れてしまいます。
・ルカによる福音書 15 章 3～7 節に、「見失った羊のたとえ」が書かれています。群れからはぐれる羊というのは、弱いことが多いです。そのため羊飼いは、その羊を見捨てることがほとんどでした。
・しかし神さまは、ちっぽけで弱々しい一匹の羊に目を留め、捜し回ってくださいます。わたしたちがたとえ神さまから離れてしまったとしても、神さまは必ずわたしたちを見出してくださるのです。

（11 月　13 日）「詩編 120 編」
主はお前に何を与え　お前に何を加えられるであろうか　欺いて語る舌よ
（詩編 120 編 3 節）

・「平和の敵」：巡礼者の歌です。長かった 119 編の後には、短い詩が続きます。ここから 134 編までには、【都に上る歌。】という表題がつけられています。エルサレムに巡礼をする人たちが、その道中で歌った歌です。
・1～2 節には、祈りが答えられたという報告があります。これが巡礼者を祈りへと駆り立てた要因です。主に頼ることで様々な苦難を乗り越えることができた、その感謝を神さまにおささげするのです。
・7 節には「平和こそ、わたしは語るのに　彼らはただ、戦いを語る」とあります。134 編までの共通のテーマは、「わたしは平和を願う」ということです。今日からしばらくの間、神さまの願う平和について考えてみましょう。

（11 月　14 日）「詩編 121 編」
わたしの助けは来る　天地を造られた主のもとから。
（詩編 121 編 2 節）

・「主は巡礼者を守られる」：巡礼者の歌です。この詩編 121 編をもとにして作られた聖歌があります。聖歌 444 番です。「山辺に向かいて　われ目を上ぐ　助けは　いずかたより来たるか　天地の　み神より　助けぞ　われに来たる」。
・この詩は、神さまが人生を支えてくださっていることに感謝をささげるものです。聖歌の 2 節では神さまはわたしたちの足を強くすること、3 節では神さまはわたしたちの盾となってくださることを歌います。
・そして 4 節はこのような歌詞です。「み神は　災いをも避けしめ　疲れし魂をも休ます　出るおり入るおりも　たえせずなれを守らん」。いつまでもわたしたちを守り、天に召されたのちも守って下さる。とてもうれしいことです。

（11 月　15 日）「詩編 122 編」
わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。「あなたのうちに平和があるように。」
（詩編 122 編 8 節）

・「巡礼者のエルサレムへの挨拶」：巡礼者の歌です。「シャローム」という言葉があります。これはヘブライ語で、「平和」をあらわす言葉です。ユダヤの人たちは挨拶として、「シャローム」という言葉を用います。
・シャロームがサレムと変化し、さらに神さまを表す「エル」が付けられた場所、それがエルサレムです。「神の平和」という意味になるのでしょう。作者は「エルサレムの平和を求めよう」と書きます。
・このエルサレムは今のエルサレムではなく、天のエルサレム、新しいエルサレムです。神さまの望まれることは、すべての人に平安が与えられることです。その思いを心に留めながら、「主の平和」と挨拶をしたいものです。

（11 月　16 日）「詩編 123 編」
平然と生きる者らの嘲笑に　傲然と生きる者らの侮りに　わたしたちの魂はあまりにも飽かされています。
（詩編 123 編 4 節）

・「さげすまれた民の祈り」：巡礼者の歌であり、救いを求める個人の祈りです。この詩は巡礼者が直接、神さまに語りかけています。1～2 節では自分の信仰を表明して、憐れみを与えてくれるように願います。
・聖書の「憐れみ」という言葉は、わたしたちが思う「かわいそうに」とか「気の毒に」という感情よりも深いものです。「はらわたが震える、締め付けられる」というニュアンスでしょうか。
・イエス様はその活動の中で、何度も「深く憐れんだ」と報告されます。ただかわいそうに思うだけではなく、一緒に苦しみ、涙を流される。そのような感情が、聖書の「憐れみ」です。神さまはわたしたちを、いつも憐れんでくださるのです。